



宮司プレス第百二十七号

彦島八幡宮 宮司 ニューズ

発行者 彦島八幡宮

宮司 柴田 宜夫

発行 平成三十年 九月 三日

「楽しみは 神の御国の 民として

神の教えを 深く思うとき」

御神域(ごしんいき)、神々に見守られて精励(せいれい)されたわけなので、人生のなかで、こんなにも神様を身近に感じながら生活できたことは、やはり、講習生の皆さんの「楽しみ」になつたと思つたのです。まず、そのことをお伝えしました。そして、千利休(せんりのきゆう)の道歌(どうか)である、

「規矩作法(きくさほう) 守りつくして 破(やぶ)るるとても 離(はな)るるとても 元(もと)を忘(わす)るな」をも紹介しました。

規矩作法とは、大工道具のことですが、千利休さんは、「茶道(さどう)」の大先達(だいせんだつ)でありますから、これは、「茶道具(ちやどうぐ)」のことです。したがって、お茶の道の「茶道具」や「お作法」は、基本中の基本をお稽古(けいこ)しなさいというのが、上の句の意味です。

道(みち)というものがつく「習い事」には、「守(しゅ)」「破(は)」「離(り)」という考え方があります。「守」とは、基本中の基本であり、習うべきものをすべて、みにつけられたとお師匠(ししやう)に進むことが許されます。ちなみに、「初伝(しよでん)」から「中伝(ちゆうでん)」へと進むわけです。その瞬間が、「破」であります。

さらに、習い事が佳境(かきよう)に入りますと「免許皆伝(めんきよかいでん)」となり、一

(わきあいあい)と講義を進めていけるのです。が、前述(ぜんじゆつ)の事情(じじやう)もあいまって、最終日(さいしゅうじつ)に、ようやく顔と名前の一致(いっし)にこぎつけました。私の科目(こぎ)に限(かぎ)っては、一人(ひとり)の落第者(らくだいしや)が(らくだいしや、ちなみに百点満点(ひゃくてんまんてん)中(ちゆう)五十九点(ごじゅうくにんじゆ)が落第(らくだい)です!)もなく、講習会(くわんしゆかい)を終(お)えました。

閉講式(へいかうしき)の前日(ぜんじつ)は、講習生主催(くわんしゆせいしゆさい)の謝恩会(しゃおんかい)もおんかい)がもよおされました。当日(とうじつ)は、研修棟(けんしゆどう)の宿直(しゆくちやく)当番(とうばん)でしたので、謝恩会(しゃおんかい)の会場(かいじやう)より場所(ばしょ)を移(うつ)すいわゆる二次会(じふにかい)というものが、講習生(くわんしゆせい)との楽しいひとときを過(すご)させて頂きました。翌(あした)日の閉講式(へいかうしき)では、講師陣(こうしじん)を代表(だいひょう)しての挨拶(あいさつ)を

昨年(さくねん)に引き続き(つづ)いて仰せつかりました。この講習会(くわんしゆかい)の会場(かいじやう)は、講堂(かうどう)に、「学神殿(がくしんでん)が御鎮座(ごちんざ)されていす。しかも、野田豊栄神社(のたとよさかじんじや)の御垣内(ごかきうち)、敷地内(しきちい)に建てられています。さらに、氏神(うぢがみ)さまである今八幡宮(いまはちまんぐう)も側近(そばちか)くです。私は、幕末(まくらつ)の万葉歌人(まんようかじん)である橘曙覧(たちばなのあけみ)の和歌(わが)を紹介(しょうかい)しました。

宮司(みやじ)の柴田(しばた)です。先月(せんげつ)の平均気温(へいきんきん)は、昨年(さくねん)に較(くら)べて、一点五度(いちてんご)も高(たか)かったそうです。さも(さも)ありなんでありまして、殊(こと)の外(ほか)炎暑酷暑(えんしよこくしよ)の外(ほか)七月(しちがつ)でした。立秋(りゅうきゆう)を過ぎれば、秋(あき)の気配(きはい)を感じ(かん)じつつ、気温(きん)も徐々に緩やか(ゆるやか)になるものと思(おも)ひきや、残暑(ざんしよ)もさらに厳(げん)しい日々(ひび)を過(すご)しました。とうとう、八月(はちがつ)に発行(はつこう)することがありませんで、けつして猛暑(まうしよ)のせい(せい)ではありませんが、現時点(げんじてん)で、十一ヶ月(じふいちがつ)遅(おそ)れ、累積(るいせき)を増(ぞう)やしてしまいました。第百三十七号(だいひゃくさんじちちごう)の発行(はつこう)です。

毎年(まいねん)、神職養成講習会(かみじやくせいせいくわんしゆかい)の直階(ちよくかい)の「神社神道概説(しんじやしんどうがいせつ)」の講義(かうぎ)を、一コマ(いっこま)五十分(ごじふぶん)の二十六コマ(にじふろくこま)、時間(じかん)にして、二十(にじゅう)一時間(じちゆうじかん)四十分(しじふぶん)を担当(たうたん)します。過酷(くわこく)な猛暑(まうしよ)の日々(ひび)の講習会(くわんしゆかい)、合宿生活(がしゆくせいかう)ですが、空調設備(きゆうたうせび)も夜(よ)もすがら、つけばなつしでありますし、集団生活(しゆたいんせいかう)でもあります。あろうことか、「ウイルス性(ウイルスせい)の風邪(かぜ)」が蔓延(まんえん)しました。ある講義(かうぎ)では、受講生(じゆせい)二十人中(にじゅうにんちゆう)十四名(じしよんめい)の方が、マスク(ますく)をつけたまま受講(じゆかう)されていす。講義(かうぎ)の後半(こうはん)になると、顔(かほ)と名前(な)が一致(いっし)して、和氣藹々(わきあひあひ)々(々)

人前と認められて、新たな自分の道を切り開いてゆく、まさに、「離」なのです。したがって、習い事のどの段階であろうが、「元」を忘れてはいけない、守りつくした「守」を忘れてはならないと論(さと)されているのです。私は、講習生の皆さんにとって、今日は、「破」と「離」を迎えていると考え、講習生にとつての「守りつくした」「守」こそ、このかけがえのない一月間であることを伝えました。これから、どんな苦しい時辛い時にも、この「守」を忘れないで、乗り越えて欲しいとの思いを伝えました。結びとして、細川平州(ほそかわへいしゅう)の教えである、宮司プレス先月号にも掲載した、「学思行相まつて良となす」という言葉を饒(はなむけ)に送りました。この講習会でよく学んだことをよく考えて、そして、実行してはじめて本当に学んだこととなるのですと締めくくりました。北は、北海道から南は宮崎県まで、二十九名の講習生の輝かしい未来をお祈り申し上げます。教えることは、やはり、学び直すことなのです。社務(しゃむ)の間(あいま)をぬって、テキストを開き、参考文献を確認したり、ちよつとだけ、学問に勤しんだ夏でした。

には知らない人々の為にも祈りを捧げます。私共のできるのは、「至誠則怛」、苦しく辛い立場におられる方をおもいやりつつ、特別、これ以上、悪いことが起きぬよう、災いを祓い、善い方向に向うように祭典の厳修を心掛けるべきかと存じます。衿(えり)を正して真心こめて、「恐れ」と「敬い」のミックスした心である「畏み」という言の葉を奏上し、一意専心神明奉仕につとめ、祈りをささげなければと思いを新たにしています。

◇いまからおよそ、八百三十年ほど昔の文治元年、西暦一、一八五年の夏に畿内(きない)を襲(おそ)った文治地震、きわめて激烈(げきれつ)だったらしく、平家物語やいくつもの古典に記録が残っているそうです。そのひとつである「方丈記(ほうじょうき)」に、作者の鴨長明(かもろちょうめい)は、「月日かさなり、年経にし後は、ことばにかけて言ひ出づる人だになし」と述べています。八百三十年後を生かされて生きている私達は、平成の歳月に起きた災禍(さいか)、阪神淡路大震災、東日本大震災、熊本地震等、枚挙(まいきよ)に暇(いとま)がありませんが、やはり、まず、「言葉にかけて」語り続けていかなければならないのではないのでしょうか。そのことが、千利休の仰(おっしゃ)った「元を忘るな」に通じるものがあると思います。ご自愛ください。

- ◇八月の祭典行事報告
- ▼月次祭 \*八月一日、十五日
  - ▼貴布禰神社月次祭 \*八月一日
  - ▼神道家(家の宗旨が神道の方)中元祭 \*八月四日〜八月十四日
  - ▼朝粥会 \*七月二十一日
  - ◇八月の宮司の行事会議等活動報告
    - ▼八幡宮関係団体
    - ◇維蘇志会八月例会 \*八月四日
    - ▼山口県神社庁、同下関支部関係
      - ◇下関支部幹事会 \*八月三日
      - ◇神職養成講習会「神社神道概説」講義 \*八月四日、八日、十八日、十九日
      - ◇神職養成講習会成績判定会議、謝恩会 \*八月二十三日
    - ◇神職養成講習会開講式 \*八月二十四日
    - ◇山口県神社庁役員会 \*八月二十四日◇御世替対策本部会議 \*八月二十四日
    - ◇下関支部夏季総会 \*八月二十七日
    - ◇下関西ロータリークラブ
      - ◆例会 \*八月一日、二十九日
      - ◇美祢社会復帰促進センター教誨活動
        - ◆集合教誨(男子) \*八月二十日
        - ◆入所時指導 \*八月二十二日